広尾町指定文化財

貞伝作・万体仏

所在地　広尾町西二条九丁目
管理者　禅林寺
指定年月日　平成一〇年一二月二一日

北海道、蝦夷地の漁業、林業などの第一次産業にたずさわった労働者は、殆んどが津軽・南部の人たちであった。主として津軽は海、南部は陸で働いていたようである。この二つの労働で生命などの危険度の高いのは海の方であり、漁業で開けた広尾町では漁業従事者の信仰度が高い。神頼み、後生願いが船乗りや漁夫の間に生まれた信仰である。信仰の対象は「守り本尊」で、守り礼であり仏像であった。広尾町で代表的なものに貞伝作・万体仏がある。広尾町で二体、えりも町で一体が確認されている。広尾町の一体は北海道開拓記念館に寄贈され、もう一体は禅林寺に現存しており、そのほか一体は本人蔵（えりも町）となっている。

貞伝は津軽半島（青森県）外ヶ浜の今別町に生まれ、二歳の時に父母の約束で弘前の誓願寺にはいり、後に、盤城国（福島県）夏井の梅福山専称寺に学ぶこと十五年、二十九歳の享保三年（一七一八）六月、生地の人々に請われ帰郷、今別の始覚山本覚寺第五世の住職となった。貞伝の教化は著しく「生き仏」とまでいわれた。昆布増殖に海中投石を勧めたり産業にも意を用いた。享保十一年（一七二六）一月、蓮華勝会金銅塔婆造立を発願、勧進にあたり、諸方から集まった古銅貝類が実に七百貫（二・七トン）に及び、翌十二年、出羽国（山形県）の鋳工、北原氏の手で高さ一丈（三・三メートル）の大塔婆を完成した。この塔婆鋳造の残余

をもって弘前の鋳工、高屋氏に造らせた仏像で、享保十五年（一七三〇）正月、自らが修法して十七日開眼慶讃した。仏像の体長は一寸八分ほど、蓮華台にのる来迎阿弥陀仏で、必ず背後に「貞伝作」の銘がある。

北海道に分布するものは道南の東西に及び、広尾に残っていることは珍しい。

これは今から二百六十九年前、竜飛・白神の津軽の波濤を乗り越えて蝦夷地に渡る漁夫や船夫が津軽を出る時、三厩に近い今別の本覚寺に詣り、貞伝から授けられた守本尊である。他人に贈与することは少なかったであろうから子孫に伝えられ、そのまま残ったものであろう。

貞伝は生前、蝦夷地有珠の善光寺に留賜したと伝えられ、その時持参した「阿弥陀如来像」が同寺の御本尊といわれ、「双番三遍返し念仏」が貞伝念仏として伝えられている。

双番三遍返し念仏は、大波、中波、小波の寄せては返す自然なリズムに合わせた念仏といわれる。貞伝は享保十六年（一七三一）造立した塔婆の地下にはいり、入口を閉じて遷化、即身成仏、生き仏になったといわれる。

「注」

万体仏＝数字の万は百、千というように数の単位というより、数が多いという意である。千体仏などもある。

後生願い＝死後に生まれかわっていくところで、来世の安楽を願うこと。

開眼慶讃＝新しい仏像を作り最後に目をいれること。転じて供養の法会を行うこと。

遷化＝この世の教化を終えて、その教化を他の世に移る意。高僧などが死ぬこと。入滅、円寂ともいう。

即身成仏＝仏語で、なま身の身体で仏となること。真言密教の教義で現世の身体そのものが仏であること。